

銀

賞

『おはなしや』

# おはなしや

長野県 佐久長聖高等学校二年 樋田優

秋ももう終わりが近く、吹く風にはなんだか雪の匂い<sup>にお</sup>がする、ある晴れた日のことでした。

「おはなしや」のねずみのおじさんは、お気に入りの椅子に腰掛け、ペンを片手にうーん、うーんとうなっていました。

「おはなしや」というのは、皆さんが知っている通り、どんぐり一つと交換に、いつでも、どこでも、誰にでも、胸がわくわく、ドキドキと高鳴るようなお話を一つしてくれる、何ともしずきなお仕事の名前です。

ねずみのおじさんは、この「おはなしや」をもつずっと長いことやってきましたので、とっても素敵なお話で、森のみんなをうっとりさせるのはお手のもの。広い広い森の中を、奥の方までずっと探してみても、ねずみのおじさんよりも上手にお話を作るおはなしやさんは、いないと言われていました。

でも、このところ、おじさんはちっともお話をしていませんでした。「おはなしや」のお店のドアの看板も、ずっと、「ただいまへいてんちゅう」のままです。

それどころか、めったに家から出てこず、たまにちらりと森の広場で見かけても、おでこにぎゅっとしわをよせ、うんうんとうなっているばかりでした。

森のみんなは、おじさんが病気にでもなってしまったのではと心配して、なんべんもおじさんの家を訪ねまし

たが、おじさんはうんうん言っぱかりでちつとも答えません。

しまいには、森のみんなはあきれて、ねずみのおじさんのことを「おはなしやのおじさん」ではなく「うんうんおじさん」と呼ぶようになってしまっているのでした。

さて、ところでおじさんと言うと、今日もやっぱり、腕組みをして、目をぎゅっと閉じてうなっています。

お部屋の奥のお勝手で、火にかけっぱなしのヤカンが、しゅんしゅんと湯気をあげているのにも、さっぱり気がつかない様子でした。

おじさんの「うーん、うん」という声が次第にどんどん大きくなっていき、いよいよヤカンの音よりも大きくなるぞ、という、まさにその時のことでした。

ドンドンドン

おじさんのお店のドアに、とても大きな何かが、勢い良くぶつかる音がしたのです。

これには、思わずおじさんも、うなるのをやめてドアまですっ飛んで行きました。

「なんだ、なんだ。一体全体何事だ」

ドアを開けるとそこには、何やらとてもとても大きくて、もじやもじやとした茶色のものがありました。

ちらりと、いったいこれは何かしら、と思ったおじさんでしたが、おじさんがあれこれと考える前に、そのもじやもじやが動きはじめましたので、それが何かはすぐにわかりました。

「やあ、クマのぼうやじゃないか」

もじやもじやは、おじさんの声を聞くと、嬉しそくに身をよじって、ぐっと下まで頭を下げ、かわいらしいお顔を見せました。

「こんにちは、おじさん」

「こんにちは。ぼつや」

クマの坊やは、おはなしやさんのお得意さんです。おじさんが、広い森のどこでお話を始めても、このクマの坊やだけはいつも駆けつけて、大きな体をお行儀よくちぢこめてお話を聞くのでした。

「おはなしやさんは、今日もお休み？」

「そうだよ。やあ、せっかく来てもらったのにすまないね。悪いけど今は、どんぐりと交換できるお話が無いんだ」  
おじさんが、すまなそうに言うつと、クマの坊やは首を振りました。

「ちがうよ。ぼくはね、おじさんが、あんまりにもずつとお休みするものだから、おじさんが心配になつておみまいにきたのさ」

クマの坊やの、やさしい心配にちよつとうれしくなつたおじさんは、ひげをひくひくさせながら答えました。

「そりゃあ、心配させて悪かつたね。でもね、この通り、おじさんはとても元気ですよ。お見舞い、どうもありがとう」

「それは良かった」

クマの坊やは、心底しんぞこ嬉しそつでした。

「それならおじさん、ちよつと気が早いんだけれどね、次のお話は、いつごろ聞けそうかしら」

さて、にこにことしているクマの坊やにつられて、これまたにこにこしていたおじさんですが、この質問には困りました。

「それはちよつと、分からないいなあ」

「どうして、分からないの？」

クマの坊やは不思議そうです。

「お話を、忘れちゃったの？」

「いいや、ちがうんだ」

「それじゃあ、どうして？」

ねずみのおじさんは、はたして、正直に話したものでどうかと、悩みました。というのも、おじさんにだって、自分が森で一番のお話名人だということを、誇らしく思う気持ちはあったからです。でも、坊やはせっかくお店まで来てくれたのです。うーん、うーんと二回言っただけから、おじさんは、坊やには特別に教えることにしました。

「実はね、おじさんは、急にお話が作れなくなってしまったんだよ」

「ええっ！」

クマの坊やは、真ん丸な目をくりくりと動かして、心底びっくりした様子でした。

「そんなあ。本当に？」

「本当よ」

「だって、おじさんは、森一番のおはなし屋さんじゃない」

「一番でも、二番でも、とにかく今は、作れないんだ」

「それじゃあやっぱり、どこか病気なのかしら？」

「いやいや、まさかー！」

びっくりしたおじさんのメガネが、かちゃんと音を立てました。

「僕はすこぶる元気や」

すると、クマの坊やは、さつきとはまた反対側に首を傾<sup>かぶ</sup>げて、それじゃあ、と言いました。

「おじさんは、どうしてお話がかけないんだろっ」

どうして、どうして、というクマの坊やの言葉に、ねずみのおじさんは、ちょっと困った顔をしました。

「それが、僕にもわからないのや」

そう、何でお話が作れなくなってしまったのかは、実のところ、おじさんにもわからないのです。

なんべんも、なんべんも、立ったり座ったり、時には逆立<sup>さかだ</sup>ちまでして考えたりしてみましたが、考えれば考えるほど、おじさんの頭の中は、もやもやと、ミルク色の霧<sup>きり</sup>に包まれて行ってしまうのです。

そうして、霧が出てくればくるほど、どんどん、お話も作れなくなってしまうのです。

「おじさんのお話を聞けないんじゃないやあ、ぼく悲しいなあ」

クマの坊やは、とてもしよんぼりとした様子で、おじさんまでも、何だか悲しくなっていました。おじさんのお仕事は、お話をして、森のみんな元気にすることです。何とか、ぼうやの悲しい気分を吹き飛ばせないと、一生懸命考えました。

「そっだ、くまのぼうや、どうか、ここはひとつ、おじさんにぼうやの力を貸してくれないかい？」

おじさんのお願いに、クマの坊やはすぐに頷<sup>うなず</sup>きました。

「もちろん、いいよ」

それから、坊やはちよつと考えて、一言つけ足しました。

「その代わりにね、新しくできたお話を、一番最初にぼくに聞かせてもらえないかしら？」

おじさんは、にっこりして頷きました。

「もちろん、いいともー！」

それから、おじさんは、ぴいぴいになっているヤカンの火を消し、お店にある中で、一番大きなひざかけを出してきて、クマの坊やと一緒に、落ち葉の上に腰かけました。

「じゃあぼつや、今、考えている途中のお話を、試しに聞いてみてくれるかい？」

おじさんがそう言って、クマの坊やに話して聞かせたのは、赤の妖精ようせいの国に暮らす、ひとりぼっちの青の妖精さんが、仲間を求めて、野原を超え谷を越え、旅をするお話でした。

クマの坊やは、最初は、目をキラキラとさせながら聞いていましたが、おじさんがお話をやめるころには、なんだかすこし、元気がなくなってしまうていました。

「まだまだ途中なんだけどね、どうだい？」

すると、うつん、と、坊やは首を横にふりました。

「これじゃあ、だめみたい」

おじさんは、ちよつと困って言いました。

「どんなところが、だめだったんだい？」

「うつん」

腕組みをして、二回、首をひねってから、坊やは言いました。

「なんだかね、ちよつとしかワクワクしないんだ」

「ほつ」

「つまないんじゃないけれど。でもね、ぼくが思つに、お話つてのは、もっとぞくぞくしちゃうようなものでなくちゃいけないんだ」

うーん、と、おじさんはうなりました。

「ぞくぞくかあ……」

赤とんぼが、すいすいと冷たい空気をきつてゆきます。

「ええつと、それは、例えば冒険したりとか、お空を飛んだりとか、そういうことじゃあ、ないのかい？」

すると、クマの坊やは、もう一回、首をひねりました。

「そつだけど、ちよつと、違つなあ」

「じゃあ、どんなことなんだい？」

今度は、おじさんが首をひねる番でした。

「そつだなあ、あのね、ぞくぞくするつていうのはね……」

クマの坊やが、落ち葉を一枚、拾いながら言いました。

「とびきり特別じゃなくてもいいんだ。なにかちよびつとでも、素敵なことがあったり、楽しいことがあったりするときに、何だかおもわず、にっこりしちゃうようなことだよ」

クマの坊やの手の先で、真つ赤な葉っぱはお日さまの光を受け、さらさらとひかりました。

おじさんは、何か、最近、ちよびつとでも素敵なことはあったかしらと考えてみました。

ここでもやつぱり、うーん、うーんと言つてみましたが、昨日もおととも、思い出せるのは、お店の中で一人、ずつとお話のことを考えていた、ということだけでした。

「おじさんも、きつと、こんな気分を知っているんじゃないかしら」

「うーん、思い出せないなあ」

「うーん、そうかあ」

今度は、クマの坊やまでうーん、うーんと言いました。

「どうしたら、おじさんも、ぞくぞくするっていうのがどんな気分か、分かるかなあ」

このまんまでは、クマの坊やまで、森のみんなに「うんうんぼうや」と呼ばれてしまつかもしれません。

すーい、すーいと、トンボが二匹、おじさんと坊やの前を通り過ぎた所で、おじさんはやっとこさ言いました。

「そつだなあ、じゃあぼうや。ぼうやがぞくぞくするのは一体どついつ時なのか、試しに、もっと詳しくおじさんに教えてみておくれ」

「もちろん、いいよ」

うーん、うんとうなるのをやめたクマの坊やは、腕組みをぱつとほどいて、真ん丸な目をつつとりと閉じました。

「ぼくがぞくぞくしちゃうのはね、例えば、赤とんぼを追いかけてるとき。どこまで行くのかわかんなくていいんだ。後ね、お使いの帰り道で、母さんに内緒で遠回りをする時。後はね……」

おじさんも、そつと目を閉じて坊やの話を聞いていました。それは、何だか新鮮で、でもちよっぴり懐かしいような感じがする話でした。

「どつ？ おじさん。ぞくぞくするっていうのがどんなことか、分かった？」

「そつだねえ」

おじさんは、目を開けてすいとお空を見上げてみました。ぼうやも、おじさんのまねをして、上を見てみました。何もかも、すつと溶けてしまいそうな、気持ちの良い青空でした。

そういえば、最後にお空を見上げたのはいつだったかしらと、おじさんはぼんやり考えました。それから、お空は、こんなに綺麗きれいなものだったかしら、とも考えました。そうして、久しぶりに見た今日のお空が、こんなにも透明なことが、少しうれしくなりました。

おじさんは、なるほど、とつぶやきました。

「うん。何だかちよつと、分かった気がするよ」

「本当に?」

クマの坊やは、嬉しそうに、身を乗り出して聞きました。

「そつだねえ、ひよつとしたら僕も、昔、ぞくぞくしたことが、あったのかもしれない」  
すると、クマの坊やはにこりとして立ち上がりました。

「良かった! でもね、おじさん、ぼく、もつと良いこと思いついたんだ」

そして、そつとおじさんを持ち上げると、あつという間に大きなてのひらにのせて、ずんずんと歩き始めたのです。

おじさんは、ちよつと慌てて言いました。

「おやおや、一体全体、どこへ行くんだい?」

「どんぐり広場だよ!」

「でも、今、ちよつどお話の続きが書けそつになつてきたばかりなんだ」

すると、クマの坊やはくすくすと笑いました。

「うんとぞくぞくするお話を作りたいなら、おじさんがうんとぞくぞくしてみなくちゃ」

そして、ぐんぐんと、風のように走り始めたのです。

「知らないものは、いくらお話し上手だって、きつと上手にお話しできないよ！　ちよつと分かつただけじゃだめだ！　ほらおじさん、目を開けてみてよ！」

最初は思わず、坊やの手にしがみついていたおじさんでしたが、坊やの言葉にそつと目を開けてみて、思わずにつこりしてしまいました。

「こりゃあまいつた、こりゃあすごい！」

おじさんは、ひげをひくひくと動かし、大きな声をあげました。まるで自分がトンボになつたみたいです。落ち葉の匂い、どんぐりの匂い、それからちよつと、雪の匂い。色々なにおいが、おじさんと坊やをごしごしと洗つては去っていくようでした。いつも見ている森は、びゅんびゅんと後ろに溶けてゆき、耳元ではぼおぼおと、風がうなっています。

心臓が、あふれんばかりに踊っているのが分かりました。

もちろん、あまりの高さと速さに、めまいがしなかつたわけでもありませんが、そのふわふわとした感じが、かえつて心地よく、おじさんは前を向いたまま、ほうとため息をつきました。

やがて、どんぐり広場につくと、クマの坊やは、広場の真ん中に、勢い良くごろんと横になりました。おじさん、クマの坊やからぴょんと飛び降りると、近くの切り株の上によじ登つて、横になりました。

「ああ、疲れた！」

大の字になっているおじさんと坊やに、かさかさと、赤、黄、橙<sup>だいだい</sup>、様々な葉っぱが降ってきます。

おじさんと坊やは、どちらからともなく、ふふふ、と笑い始めました。降ってくる葉っぱも、かさかさとしてなんだかくすぐったいですし、それに何だか、胸のあたりが、ふわふわ、くらくらとして、これまたくすぐったいのです。

やがて、その葉っぱがお布団ぐらいに降り積もったところに、おじさんが、むくりと起き上がりました。

「さてさて。ぼうや、そろそろ起き上げるかい」

ぼうやは、まだ少し、ふふふ、と笑いながらおじさんを見ました。

「ああ、楽しかった！　また、おじさんのお店まで、走って帰ろうよ」

おじさんも、楽しそうな坊やを見て、思わずふふふ、と笑いながら、首を振りました。

「その前に、ぞくぞくするっていうのが、一体どんなことなのか、教えてくれたお礼をしなくちゃ」

「お礼？」

坊やは、むくりと起き上がって言いました。

「そうさ。あいにく、あげられるような物は、何にも持つてこなかったんだけどね、でも、僕には、お話がある。良かったら、聞いていかないかい？」

おじさんがにっこりと笑ってそういうと、坊やは、わあい、と両手をあげて、それからその手を口まで持つてきて、小さな声でおじさんに聞きました。

「ぼく、とっても嬉しいんだけどね、どうせならね、森のみんなにも、おじさんの新しいお話を、聞いてもらいたいんだ。でも、どうかしら。久しぶりにみんなの前で話したら、おじさんは、緊張しちゃっ？」

「いやいやー」

おじさんは、大きな声でそう言つと、自分の胸を、とんとたたいて見せました。

「大丈夫ですとも。何と言つても、おじさんは、森一番のおはなしやさんだからね」

クマの坊やは、それを聞いて嬉しそうにつこり笑つと、くるりと広場を見渡しました。

「さあさあみんな、おはなしやのおじさんの、楽しいお話が始まるよー」

するとどうでしょう、木と木の隙間<sup>すきま</sup>、葉っぱの影、切り株の後ろから、森のみんながぴょんぴょんと、飛び出てきました。

「くまくんつたら、おじさんとお話ししてたと思つたら、急に走り出しちゃうんだもの」

「おじさん、早く早く、新しいお話を聞かせてよ」

「うんうんおじさんが、おはなしやのおじさんにもどつたー」

森のみんなは、□々にそんなことを言いながら、おじさんを囲んで、何だか嬉しそうです。

おじさんは、みんなの顔を見ながらもう一度、ふふふ、と笑つて、大きな声を出しました。

「さあさあ、皆さん、おはなしやさんが来しましたよ。思わずぞくぞくするような、素敵なお話ありますよ。今日なら特別、どんぐりなしで、お話ししよう。さあさあ、さあさあ、早くおいで。どんぐり広場に、さあさあ、集まれ」

さあ、皆さんも、森に向かってそつと耳をすませてみてください。ネズミのおじさんの声が、聞こえてくるかもしれませんよ。